



詩人は、古い木製の細長い窓を開けた。細い光が、部屋に差し込んでくる。何日かぶりに気分が良かった。時刻は、まだ正午には間があった。グラスに水を注ぎ、皿にパンをのせる。一杯の水で、わずかばかりの硬いパンを流し込むと、簡単な朝食は終わった。

ギシギシと音を立てる木の床を歩き、書棚に並べられた本の中から一冊を手取る。パラパラとページをめくり、再び本を書棚に戻す。指で本の背表紙をなぞり、また別の一冊を手取る。三度目に手にした本を上着のポケットに押し込むと、詩人は部屋を出た。

深緑色の扉を抜け、アパートの狭い内階段を降りていく。建物の外に出ようとする、まぶしい光が石畳に反射して目が眩む。何日かぶりの外の世界に、詩人は一步を踏み出すのを躊躇した。外は光に満ちていた。光と人々の喧騒に満ちていた。それらは、彼を元の世界へ押し戻す勢いで迫ってきた。詩人は、息苦しさを覚えた。光は彼の目を射抜き、喧騒は彼の耳を引き裂き、人々の視線は彼の心を抉った。呼吸が苦しく、息が止まるほどだった。外の世界は彼を拒絶した。彼は、再び自分の部屋へ引き返そうとした。

振り向くと、アパートの中は、光に射抜かれた詩人の目には、暗黒の闇だった。巨大な闇が底のない大きな口を開けて、彼を吸い込もうと迫ってくる。突如、闇の中から巨大な黒い蜘蛛が現われた。蜘蛛は、無数の太い足を伸ばし、彼を捉えようと迫りくる。詩人は、その毛むくじらの足から逃れるように、外の世界へころがり出た。

「あぶないぞ！死にたいのか！」

馬車の御者が罵声を浴びせた。詩人は慌てて飛びのき、通行人にぶつかった。

「失礼」

詩人の言葉に、美しい服を纏った中年の婦人は、眉間にしわをよせて通り過ぎた。

広場にあるバルカッチャの噴水が、アクアブルーの水をたたえ、光に煌いていた。水は彼を拒絶しなかった。詩人は吸い寄せられるように水に向かっていった。

すると、揺れる水面に水の妖精が映った。海藻のように深い緑色の髪を流れるように波打たせた、妖しげな黒い瞳の妖精が、じっと詩人を見つめている。ふと、妖精の肩に小さな黒い蜘蛛が這い上がってきた。詩人は、恐れ飛びのいた。

パシャッ

突然、水面の水が跳ね、水面に映った妖精が歪んで消えた。

「何を見ている？」

鋭い女の声が聞こえた。詩人が顔をあげると、水の妖精が外の世界に立っていた。ジプシー女だった。アクアブルーの水に映っていた深緑色の髪は、艶やかな黒髪だった。黒髪には、明るい太陽のようなオレンジ色のガーベラが飾られていた。眩しい黄色の服をまとい、赤い腰布を巻いていた。耳飾りの黄金の輪がキラリと光った。

女は、水盤にたまった水に指をつけ、パシャッと水をはじいた。鋭い視線を詩人に向けたまま、燃えるような赤い唇をゆがめていた。詩人は、女の鋭い視線から目をそらすことができないまま、呆然と女を見つめていた。女は詩人を見つめたまま、赤い唇をわずかに開き、同じように赤い舌を僅かにのぞかせながら首を傾け、ほとぼしる噴水の水を飲んだ。水気を含んだ女の唇は日の光をうけ、いっそう赤く輝いた。詩人は、その赤色に吸い込まれそうになった。女は、嘲る

ように唇をゆがませると、声高く笑い出した。彼は、女の笑い声に現実にひきもどされた。女はさらに声を高くして笑うと、手をひらひら振りながら、広場を去っていった。

詩人は、女が姿を消すのを見届けず、足早に広場の階段を上り始めた。階段の上から、黒い帽子をかぶりステッキを手にした老人がゆっくりと降りてきた。老人の歩調と共に、突然、時間の流れが緩やかになった気がした。詩人が階段を上りきろうというとき、ようやくと老人とすれ違った。老人は詩人の横にくると、ピタと足を止めた。老人を見ると、老人は帽子に手をあて小さく会釈をした。明らかに知り合いではなかった。詩人が当惑した面差しでいると、老人は再びゆっくりした歩調で階段を降り始めた。詩人は、老人の背をしばし見つめてから、最後の一段を上りきった。

階段の上に立ち、ふと見上げると二対の鐘楼をもつ教会が空にそびえていた。突然、教会の鐘が響き渡り、無数の鳩が飛び立った。

—神の栄光だ—

詩人は無数の鳩が飛びたつた空を眺めながら思った。鐘が鳴り止むまで、赤みがかかった石造りの教会の鐘楼を見上げていた。しかし、詩人は決して教会の中へ入ろうとはしなかった。

かつて一度だけ入ったことがあった。ここにきてまだ間もない頃に。中には、十字架降下のキリストと嘆き悲しむマリア、足に香油をぬるマグダラのマリアの大理石像が永遠の時を刻んでいることだろう。そして大理石像の脇壁には白百合を手にした聖女や聖人たちの絵が描かれ、上部には天使が舞っていることだろう。詩人は流れの止まった時間を再び見ようとは思わなかった。

彼は、教会を通り過ぎると、丘の上を歩いた。木々の緑が目にも優しく、太陽の光も葉のフィルターを通して見れば穏やかだった。木々の葉を渡る風を感じながら、木漏れ日のさざめく舗道を歩いていく。

小高い丘の、開けた場所から街を一望した。ローマの松の合間から、オレンジ色の屋根とクリームイエローの壁の家々が望める。所々に教会の丸いドームが点在している。それら街並と自然は美しく混ざり合い、あらゆるものが調和していた。丘から見えないところでは川が流れ、古代神殿の円柱が、今は草地となった遺跡の中に倒れ、そこを野良猫が暇そうに闊歩していることだろう。古代から中世、現在の時間がそれぞれに点綴しながら混在し、一つの時間の流れとなって渦巻いている街。一つの街でありながら一つの国である街。自然と芸術と生活が渾然一体となり調和している街。それがこの街、悠久の時を刻む永遠の都なのだった。

しかし、全ての調和の中で、詩人の心は疎外されていた。詩人は、眼下の世界から目をあげ、透き通る空を見上げた。はるか遠い故郷に続く空を。

あの空の向こう、海を隔てた、かの地にいる乙女に想いをはせながら。

野に咲くデイジーのように慎ましく輝く笑顔の乙女。彼女の青い瞳は絵画であり、彼女の流れる黄金の髪は音楽だった。

しかし、彼女の輝く微笑が彼に向けられることはなかった。彼女のまわりには、いつも光りあ
る人々が取り囲んでいた。詩人はいつも部屋の隅に立って、彼女を見つめていた。伝えること
のできない想いをどれほどの言葉に書きつけたことだろう。彼女は、彼にとって創造の源、彼がこ
の世に生き愛した人生の証だった。

しかし、彼は彼女への想いを故郷に残し、一人この地へやってきた。彼の体は、より強い太陽を
必要としていた。より強い水が彼をうるおし、より強い光が彼を癒すこの街へ。

この街は、確かに彼に強い光と水を与えた。しかし、彼の魂の渇きを癒すことはできなかった
。詩人は、多くのものを失った。いや、初めから得てはいなかったのだ。彼は、貧しかった。
彼は、孤独だった。肉親もなく友もなく、愛する者からも省みられず、貧困の中で病んでいた。
彼の言葉は、誰の目にもとまらなかった。この世において、彼の存在は無に等しかった。彼は、
全てに見捨てられ、全てから疎外されていた。

—消極的受容力—

ふと彼の心の中に、その言葉が浮かんだ。運命は、自分の力で切り開けるとい
う人もいる。

だが、個人の力では抗うことのできない巨大な流れもあると彼は思った。

自分で選択できることもあるだろう。だが、見えざる大きな力によって選
ばされていることもあるだろう。彼にできることは、ただそれらを受け入れること
だった。

今、絶望はそれ自体、風や水のように穏やかだった。

彼が望むものは唯一つ。

かの空へ飛んでゆくことだけだ。

詩的想像力の見えざる翼を借りて。

その時こそ、彼の魂は、あらゆる束縛から解放されて自由になるだろう。

詩人は、上着のポケットから本を取り出した。表紙は擦り切れ、タイトルの金の文字がほとんど判別できなくなっていた。彼はページをめくり、もうすでに空で暗唱できる詩を読んだ。この本の詩人は、もはや肉体をもたない言葉になっていた。

彼はペンをとりだし、本の余白に書き記した。

—情熱と歓楽の詩人よ

おまえは、地上にその魂を残していった

おまえの魂は、今天国にある

新しいその場所で、おまえは二重に生きているのか—

詩人は本を閉じポケットにしまうと、再びもと来た道を歩いた。

彼は、喉の渇きを感じた。あの広場に戻ったら、噴水の水で喉の渇きを潤そう。そう思いながら道を歩いていくと、再び鐘楼のある教会の前に戻ってきた。教会の前には、イーゼルを立てた絵描きがいた。様々な絵の具の色がキャンバスの上で混ざり合っていた。まるでパレットのようだ。完成に近くも見え、全くの未完成のようにも見えた。絵描きは黙々と、ただひたすらに絵の具を重ねていった。

詩人は、広場にもどる階段を下った。下には、バルカッチャの噴水の脇に、再びあのジプシー女が立っていた。いや、正確に言えば踊っていた。人々が、彼女の周りを取り囲んで、踊りを見ていた。詩人もその輪に加わった。もちろん誰も彼の存在を気にとめはしなかった。ジプシーの男が、激しいリズムの音を叩く。それにあわせ、女は黒い髪を乱し、腰を激しく振り、手をくねらせながら踊っていた。手首にかけられたいくつもの黄金の輪が彼女の踊りにあわせてジャラジャラと鳴った。彼女の髪に差していたオレンジ色のガーベラが落ちた。女は気にせず踊り続けた。

詩人は、ふと、水気を含んだあの赤い唇を思い出した。

そして、ある詩の一節を思い出した。

—私は、一人の美女に出会った

その美しさは比類なく、まさに妖精の娘のようだった

その髪は長く垂れ、その足は軽やかで、

その眼は妖しげな光を湛えていた—

ジプシー女は、詩人を見つけると踊りながら、あの射るような眼差しを向けた。そして、再び嘲笑するような笑みを赤い唇に浮かべた。女の激しい踊りは、詩人の鼓動を速めていった。まるで一緒に踊っているような息苦しさを覚えた。そして、女の刺すような視線に胸を射ぬかれる思いだった。

ふと、女の黒い髪の間から、黒い毛むくじゃらの足の小さな蜘蛛が這い出してきた。蜘蛛は、女の体を這い降りると、詩人のほうに向かってきた。群集の誰も、その蜘蛛に気づかないようだった。音楽と女の踊りに合わせるように、蜘蛛は大きくなっていった。無数の足を動かし詩人に近づいてくる。詩人は、蜘蛛から逃れようとしたが、無数の足が詩人の体を掴み込み、巨大な口に吸い込もうと迫ってきた。逃れようと、もがけばもがくほど、蜘蛛の足は詩人の体に食い込んだ。

「うっ」

肺がやぶれたような苦しさに、詩人は吐血した。彼の体は噴水の中に倒れ、その水が赤く血に染まっていった。

ジプシー女が、地面に落ちたガーベラの花を空に放り投げた。ガーベラのオレンジ色が一瞬、太陽に重なって、赤く染まった噴水に落ちた。人々が振り返り、噴水に倒れた詩人を見つけて騒ぎ始めた。詩人は、ガーベラの花を掴もうと手を伸ばした。しかし、何人かの男達に噴水から引き出された。詩人は、担ぎ出される時、群集の中に、再び、あの黒い帽子の老人を見た。薄れゆく意識の中で、その老人が帽子に手をあて、再び軽く会釈をするのを見た。

そして、詩人の意識は、あの黒い生き物の中に吸い込まれていった。

広場で騒ぎが起きていた頃、広場の階段の上で、絵描きはキャンバスに最後の色を加えた。絵描きは布で絵筆を丁寧に拭くと、画材をしまい、その場を後にした。

空はあくまでも青く、オレンジ色の太陽が強い光を投げかけていた。

(Fin)